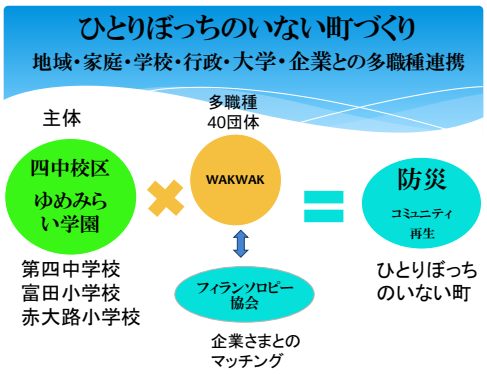
15 「ひとりぼっちのいないまちづくり」 ―地域・家庭・学校・行政・大学・企業と連携しながら ただいま～と言える子どもの居場所をつくる―

岡本　工介氏（一般社団法人タウンスペースWAKWAK　事務局長）

【2019年3月10日合同報告会】

（１）様々な社会課題が詰まっている地域で子どもが主役の取り組みを



私は、一般社団法人という地域の非営利団体の立場からまちづくり全体の絵を描きつつ、学校とも連携している取り組みについてお話し致します。テーマは「ひとりぼっちのいないまちをどうつくるか」です。対象としている地域は、高槻市立富田小学校、赤大路小学校、第四中学校の3校がある校区で、「ゆめみらい学園」と名付けています。そこに、地域・家庭・学校・行政・大学・企業の約40団体を巻き込みながら、社会変革全体のマネジメントを我々がさせて頂いております。

2017年、子ども食堂を立ち上げた取り組みをNHKに撮って頂きました。Webで地域アーカイブ高槻と引くとご覧頂けます。この活動の延長線上にある第2弾をこれからご説明致します。

第2弾では、中学1年生が、子どもの貧困解決に取り組む時間を総合学習の時間に中に設けました。この地域は、同和地区を含みます。私もそこの出身なのですが、公営住宅が19棟、508戸あります。そういう意味では、地域の中に様々な社会課題が詰まっています。子どもたちは今回子どもの貧困解決のために動きましたが、「子どもの貧困」という言葉が生まれる以前から、ある意味かなり厳しい状況を負っている子たちが多く、市民運動が行われてきた歴史があります。そこで生まれた、地域・家庭・学校・行政と連携する文化が最大の強みです。それを今回企業と大学にも広げて取り組みました。

もう1つ、ここには元々弱者を見捨てない文化があります。子どもの貧困を解決するのに連携できる人がたくさんいらっしゃるということです。

事業が生まれた背景には、過去に向き合った虐待の事例があります。この虐待を受けた子たちは今はもう高校生になっていますが、当時家には居場所がありませんでした。「家に変わる地域の居場所を作ろう」と、子ども食堂を立ち上げました。子ども食堂には一般的に2つの形態があり、1つはクローズドのもので、少人数の課題を持った子たちを支えていく「ケア付き食堂」というものです。もう一つは今日ご報告させて頂く「共生型食堂」いわば社会変革型です。社会変革をしていくために、1000人規模の「わくわく食堂」というものを行なっています。

大切にしているのは、子どもは支援される側ではなく、主人公であるということです。また、地域性の関係から特に家庭状況が厳しい子たちにもスポットライトが当たることを何よりも大切にしています。NHKの第２弾を是非ご覧頂きたいのですが、かなり厳しい子たちが前で司会をしたりしています。クラスの中には、比較的発表が得意な子たちもいますが、

そうした安定層の子だけが取り組みをするのではなくて、その反対側にいる、学校になかなか馴染めない子たちも含めてスポットが当たることを願い、この実践をさせて頂いております。

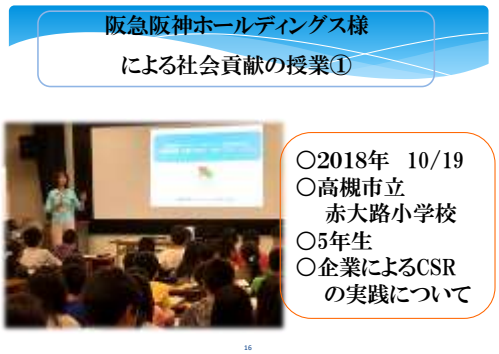
（２）子どもたちの力をコミュニティの再生に：SRPDCAを回す

「ひとりぼっちのいないまちづくり」がテーマだったのですが、2018年6月18日に大阪府北部地震が起こり、その震源地は高槻市でした。19棟508戸あった市営住宅のうち、2棟が倒壊の危険有りということで取り壊されてしまいました。

この状況から、子どもたちがどんなアクションを起こせばコミュニティの再生に携われるか考えたのが第2弾です。今回は防災・コミュニティの再生事業に、学校にも加わって頂きました。ゆめみらい学園校区では、小中9年間を通して総合的な学習の時間「いまとみらい科」を実践しています。

子どもたちの活動の実践においては、いわゆるPDCAサイクルに、SRを付けたものを用いています。SというのはStandingで、なぜその取り組みをするのかを考える。RはResearchです。地域に出向いて様々な団体が実際にやっている活動を知る。その上で子どもたちができる参画プランを計画し、実践、振り返るというのが一連の流れになります。

総合学習の学習項目に、「地域の参画」があります。中学校では、1年生が福祉の授業を行ない、またわくわく食堂の中で寄付を集めることもして頂きました。2つ目は、赤大路小学校での高齢者支援の取り組みです。どちらも、「ひとりぼっちのいないまちづくり」のカテゴリーの中での学びです。赤大路小学校には、日本フィランソロピー協会さんにお繋ぎ頂きまして、阪急阪神ホールディングスさんの授業を2回して頂きました。企業のCSRについてご説明して頂き、子どもたちはもちろんほとんど知らない話でしたが、実は、学校の先生方にそれを知って頂きたいという意図がありました。



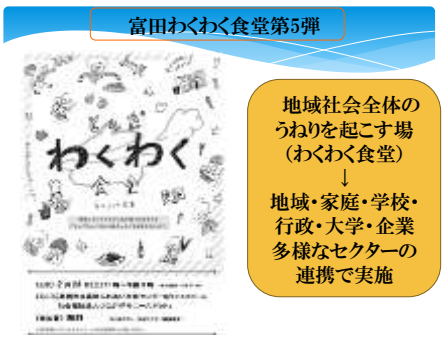
子どもたちがSRPDCAを使い計画していく上でとても参考になったのは、2時限目の授業です。阪急電鉄の創業者小林一三さんが、どのように街を作って来られたかという話をして頂きました。はじめは街がないところに、沿線を敷くことで街を作っていくという話です。このお話が、子どもたちがこれからPlanとDoをしていくための1つの大きな参考になりました。

富田小学校では、災害支援の授業を実施しました。実は5年生の中に、取り壊された市営住宅に住んでおり強制避難になった子がおり、同級生にもそうした困難な状況の子がいるということを子どもたちは分かりながら授業を進めました。

ここでは、チャリティーグッズとして、子どもたちの取り組みをまとめた冊子「つながりBook」を制作しました。背景としては、子どもたちが地域で災害に取り組む団体さんにResearchして学んだことをDoする時に「この繋がりを継続していきたい」という話が出たのです。この思いを受けて当法人も協賛し、1000部作りました。これを売って寄付を集める仕組みになっていて、その寄付金を次年度以降のコミュニティの再生事業に活かしていくということを行なっています。

【Ⅳ：地域の取り組み】

（３）「富田わくわく食堂」による社会変革



富田小学校、赤大路小学校、第四中学校も関わって頂いている「富田わくわく食堂」は、地域社会全体を巻き込みながら社会変革を目指すということを謳っています。多様なセクターに関わっていただいて行ない、のべ1260名が参加しました。その繋ぎ手として当法人が主催となり、社会福祉協議会さんや日本フィランソロピー協会さんのご協力、サンスターさんのご協賛をいただきました。実は、相対的貧困の中で育つ子どもほど、口腔破壊、虫歯が多いという実態があります。またサンスターさんは高槻が本社の企業さんなので、歯ブラシを提供していただいております。そのほかにもふーどばんくOSAKAさんから1000食くらい食べ物をいただいたり、大阪ガスさんの「火育」プログラムをして頂いたりなど、様々な企業・団体さんに動いていただきました。

学校からも、それぞれ取り組んだことを報告してもらいました。赤大路小学校のテーマに「社会の温度計を上げよう」というのがあります。実は段階がありまして、小学校低学年は、おうちの温度計を上げようということからスタートします。おうちの温度計を上げて、社会の温度計を上げる。これが世界に繋がっていき、また自分の暮らしに繋がっていく、という取り組みを小中一貫で積み上げているという状況です。

ほかには、日本フィランソロピー協会さんに繋いでいただきましたTOAという音響会社さんによる防災の人形劇や、歯科衛生士さんによる口の健康の話があったりなど、みなさん全員ボランティアで、この日だけで100人以上に関わっていただきました。赤大路小学校の生徒は、高齢者の方も来られるような昔遊びコーナーを考え、実施しました。

中学生が実施してくれた募金活動へのご寄付は、2万1,309円となり、チャリティーグッズは39冊、1万9,500円分売れました。

事業を通して、様々なセクターの方と連携させていただくのですが、企業の方、学校の先生、行政職員さんもそうですが、どの団体にも願いを持った方はいらっしゃいます。その方とコアを組むことで、社会変革に繋がっていくなという感じがします。例えば、高槻市が本社の某食品会社の執行役員さんから先週電話をいただき、「こういう取り組みをされているなら、ぜひ自社食品を提供したい」というお話をわざわざいただきました。これもある意味願い、共感して、電話を下さったということです。阪神阪急ホールディングスさんからも助成金をいただくことになっておりますが、これも願いに共感して動いてくださる方がいらっしゃって、それが1つのコアになり、協働の部分や社会変革になっています。

これらの取り組みの結果として、高槻市でも子ども食堂に対する補助金が制度化されました。ある意味ボトムからの社会変革の結果です。次年度以降構想しているのは、中学校でSDGsの取り組みをしながら、コミュニティの中で民家を改装し、子どもたちの「こんな場所を作りたい」という願いを受けた子どもの居場所を作ることです。

（了）

16　石巻を日本で一番面白い街にするために

斉藤　誠太郎氏（一般社団法人ISHINOMAKI2.0　理事）

【2019年1月26日（土）石巻セミナー】

私の生まれは北海道の北見で、大学時代は神戸にいました。在学当時は阪神大震災から10年くらいの時期です。その後東京で働き、震災から2年後の2013年から石巻に来て、ISHINOMAKI2.0で働いています。

話の流れとしてはまずは団体の活動を紹介し、次に、石巻の面白い大人や活動している高校生を紹介します。

この場にいる皆さんは十分活動的だと思いますが、何か活動をする時には、とりあえず動いてみることが大切です。学校や家庭、友だちの間だけに止まるのではなく、もっと外に出て地域社会に触れてみる。自分は研究者ではないので、実践の中で得た学びや思うところをお話させていただき、それがきっと最初の唐木先生の話につながると思います。

（１）ISHINOMAKI2.0が生まれるまで

ISHINOMAKI2.0は、3.11、東日本大震災をきっかけにできました。震災前の石巻がどのようだったか知っていますか？　ご親戚から聞いたことのある皆さんも多いかもしれませんが、昔はすごく栄えた街でした。漁業が盛んで経済的に潤い、独自の文化が栄えた、オリジナル性のあるとても面白い街でした。それが高度経済成長期にバブルが弾け、シャッター商店街が増え、街を閉塞感が覆っていたなかで、震災が起こりました。

震災直後は、立ち上げたばかりのISHINOMAKI2.0の仲間と一緒にボランティア活動をしていました。だんだん瓦礫が片付きインフラが整ってくる中で、「次の街の課題はなんだろう」と考えた時に、それは先ほど言った震災前からの課題だと思いました。人が流出し、経済が滞り、若者が街に魅力を感じられずどんどん離れていく、いわゆる「過疎化」が起きていました。正直に言えば、震災は必ずしもこの課題には関係ないと思いました。

ボランティアが終わった後、夜な夜な鍋を突きながらそんなことを石巻の人たちと話している中で作ったのが、ISHINOMAKI2.0という団体です。この「2.0」には、バージョンアップの意味が込められています。復旧復興させ、1.0＝元の街、シャッター商店街に戻すのではなく、前よりも面白い楽しい街、若者が「この街って面白い。自分も何かしたい！」と思える街にしていこうという思いで2.0にしました。キャッチコピーは「世界で一番面白い街を作ろう」です。

（２）石巻という場にあるものを生かして

団体の活動は幅広いです。街が面白くなることなら何でもやります。

例えばイベントです。「こんなことあったら面白い」「こういう街の使い方もある」という観点から様々なイベントを行ないます。例えば、石巻は水産の街ですが、実はお米「ササニシキ」を日本で一番作ってることを皆さん知って

いましたか？　「ササニシキ」はお寿司ととても相性がよいお米で、和食屋では人気があります。そういう、地元の人もあまり知らないけど、「実は凄い・魅力がある石巻」を発信するための企画をおこなっています。ほかには、「岡田劇場」という元々街なかで映画館を運営し、震災後は興行師として様々な地域、屋外やコミュニティセンターなどで上映会をされている方達と一緒に「野外上映会」を企画したり、呉服屋さんと連携して、若い人にもっと呉服を着てもらおうと浴衣を着る街コンを行なったりもしました。

また、遊休不動産のリノベーション（改修）にも力を入れています。シャッター商店街で使われていないところを、人の居場所に変えています。事例の一つとしてISHINOMAKI2.0が活動拠点にしている「IRORI」をご紹介します。ここは、今日の会場である商工会議所場所から歩いて2、3分ほどの所にあるガラス張りのビルで、商店街と商店街の交差点という街のど真ん中というとても良い場所です。昔は栄えていて家賃も高く、人が集まる場所だったのですが、震災によってボロボロになってしまいました。街の真ん中がこんな場所だとちょっと元気なくなるよね、ということで、震災をきっかけに来てくれたボランティアの人と日曜大工で改装しました。仲間に建物デザインをしている人がいたので力を借り、全部真っ白に塗ってガラスを前面にはめるというシンプルだけどおしゃれな場所にしました。普段は事務所のように当団体のスタッフが使ったり、あるいはノマドという、事務所ではない場所で仕事をする人が来る場所になっています。また、お金をいただいて、音楽や演劇のちょっとしたイベントやワークショップもしています。呉服屋さんが着物パーティーをしたり、手作りの結婚式会場に使われたりと、街中に賑わいをもたらす場所になっています。

（３）高校生と協働した賑わい作り

様々な活動をしているISHINOMAKI2.0で、私が行っているいるのが教育事業で、中学生や高校生を対象にした教育プログラムをIRORIで行なったり、学校と連携しての地域に出る授業やキャリア教育、地域と学校の連携・協働をみんなで考える教育シンポジウムを実施しています。

これらを始めるきっかけは「自分たちも何かしたい」と言っている高校生たちに出会ったことでした。そこで「いしのまき学校」という、石巻地域全体を学び場とした学校外の社会教育プログラムが始まりました。

「いしのまき学校」の活動のひとつに、プロジェクト型学習があります。自分でテーマを決め、地域の中で活動していきます。例えば、ファッションやドレスが好きな子が、石巻を元気付けるためにオリジナルのドレスを作って街中でドレスショーをするとか、川開き祭りに若い人がどんどん来なくなっていて残念だと思った高校生たちが、若い人が来るようにインスタ映えする場所を祭りの時に作るなどをしています。こうして、人を呼び込むことを高校生が企画するのをISHINOMAKI2.0の私たちがお手伝いしています。

その他には、街で様々な活動をしている大人たちに話を聞き、どんなこだわりから仕事に取り組んでいるのかを伺ったり、農漁業に携わる方々に体験をさせていただき、仙台や東京に限られない、石巻という地域の魅力を感じてもらっています。そうした活動を行なう中で、自分たちは将来どう生きていくかを考えてほしいと思っています。

今のところ、いしのまき学校の参加者は10人くらいです。もう少し人数が増えるかと思っていましたが、この「IRORI」という場所にガラガラと開けて入り「いしのまき学校」という未知のプログラムに参加するのはなかなかハードルが高いようです。

（４）街全体で子どもを育てる

それでも子どもたちが地域で学ぶことがとても大事だと考えていて、最近は「いしのまき学校」のノウハウを活かしてここ数年は積極的に学校と関わり連携しての授業づくりを行っています。特に石巻西高校や桜坂高校などと連携しながら、生徒が地域に出たり、逆に地域の人が学校に入ってきたりするプロジェクトをどんどんやっていこうとしており、学校も変わってきていることを感じます。

教育というと、学校や教育委員会をイメージされる方が多いかもしれませんが、最近はさまざまな人が学校の教育にすごい期待を寄せています。例えばキャリア教育では、宮城県の地元の企業を応援している部署が学生のキャリア教育支援に予算をつけていたり、隣の街ですが南三陸商工会が地元の志津川高校で会社紹介をやったりしています。

（５）石巻の『人』

石巻には様々な面白い人がいます。震災をきっかけに新しいことにチャレンジしている方々がたくさんいらっしゃいます。元々寿司屋だった人が石巻工房という家具メーカーの工房長になったり、呉服屋さんが呉服と並行して石巻こけしという創作こけしを作っていたり、元々水産高校の先生だった人が地元の浜でカフェをやっていたりします。

なぜこのような活動をしているかと言いますと、もちろん被災地復興のため、地域貢献のためもありますが、1番のモチベーションはやはり自分の心が動く、自分が課題だと思うことをどうにかしたいという思いがあるからです。思いに忠実であるから面白いこともできるのではないかと思っています。様々な人が自らの思いに素直に活動することで、結果的に街が元気で面白くなると思います。石巻に住む14万人が、自分が好きなことを自力でやっていく、そうすることでこの街は、世界で一番面白い街になると思います。

子どもや若者がこれからの時代に合った学びと成長を得るためには、彼らが地域に出て動き、学ぶことが必要だと思います。そして、そのためには子どもと最も深く接点を持っている学校に積極的に関わっていただき、地域と連携してもらうことが大事だと思っています。学校にとって地域は最も身近な社会であり、教材だと思っています。実物に触れ、学びを実践できる場。逆に学校という場も、社会に出たりするために必要な基礎的能力や動くための力を付ける場だと思っているので、地域に出て社会を感じることが、子どもの中の「もっと学びたい」という思いを刺激し、頑張る力にもなるのではないかと思っています。

学校だけ、または地域活動だけ頑張ると言うよりも、学校と地域でともに学び活動する、そのことを繰り返しながら子どもたちが「自分は何をしていこうか」を考えることが大事だと思っています。街の子たちが考え動き、学ぶことを繰り返し続ける環境を地域につくっていきたいと思います。（了）

17　郷土愛を育む「高校生百貨店」プロジェクト

神澤 祐輔氏（特定非営利活動法人かぎかっこPROJECT　理事長）

【2019年1月26日（土）石巻セミナー】

私自身の出身は兵庫県三木市で、小学生の時に阪神淡路大震災を経験して被害を受けました。私の住んでいた地域は、建物の倒壊はありませんでしたが、被災したという経験から、今回東日本大震災をきっかけに石巻に移住して若者向けの活動をしています。

（１）地域を担う若者を育てたい

かぎかっこプロジェクトの目標は、若者が地域で輝く力を育むサポートをすることです。震災の1年後、2012年時の石巻の人口流出入データを見ると、高校生世代の約75%が、進学と就職で石巻を離れていることが分かりました。この原因を考えた時、震災が原因で就職先が少なくなったことも大きな課題でしたが、もう1つ、「若者が地元の魅力を知らず、地域を離れざるを得ないこと」が課題なのではないかと思いました。私たちが復興を考えた時、真っ先に思いついたのが、若者が地域に地元愛を持ち、将来地域のために活動できる場を作ることでした。当然、建物や道路の復旧も大事ですが、将来街を担う若者を育てていくことが、本当の復興なのではないかと思いました。

（２）「高校生百貨店」の取り組み

私たちが活動を始めたのは2012年です。石巻市役所の1階で、高校生が作る高校生がつくる「いしのまきカフェ「　」（かぎかっこ）」を高校生たちと企画運営することからスタートしました。2012年11月から営業を始め、残念なことに2018年8月に閉店しましたが、この場を通して、高校生が「石巻を元気にしたい」という思いからメニューを開発したり、地域のイベントに参加したりと、地域との接点をたくさん作ることができました。6年ほど続いたこの活動が、今の活動のベースになっています。

「高校生百貨店」に携わっているのは、全員石巻や女川、松島に住んでいる高校生です。2016年に立ち上げ、年に1～2回開催しています。内容としては、高校生がバイヤーとなり、地域の「いいもの」を発掘し、その商品を市外で販売するという取り組みです。各地に行き、現地の良いものを自分たちの舌で味わい、生産者の方に実際に話を聞き、「良い商品だ」と思ったものを選ぶ人がバイヤーです。これを高校生自身が地域を舞台に体験し、自分達が選んだものをしっかりと販売します。

私たちがこの活動を始めたのは震災から5年経った頃です。震災当時、津波により多くのお店が流され、働く人手が足りなくなったという厳しい状況から、お店を立て直して商品を販売できるようになっても、販路をなかなか広げられないという地域の方の声を聞き、高校生が代わりに販売すれば、地域の魅力を発信する意味合いでも良いのではないかと考えた

ことがきっかけです。それ以外にも、地域の小さなお店は高齢の経営者の方が多く、お店のPRが苦手な場合もあり、高校生が売り方を一緒に考えるのは良いことではないかと思いました。例えばSNSなど、高齢の方が苦手な発信方法で高校生が販売すると、生産者さんの思いを伝えることもできるのではないかということもあります。

また、商品を知ることを通して、結果として多くの人に石巻を訪れてほしいと考えています。石巻の高校生が販売することで興味を持ってもらい、そこから石巻のファンになって石巻に来ていただく、そういう動きが生まれてくれば良いと考えました。

高校生百貨店は4つのステップで活動します。最初は、地元にどのような商品があるかを地元の方に聞いたりインターネットで調べたり、実際にお店を訪れてみたりしながら商品を探すところからスタートます。2つ目が商品の選定。次に、生産者や企業を訪れ、選んだ商品についてお話を聞きます。最後が市外での販売会です。実際に試食をしてもらいながらお買い物に来たお客さんと色々お話しをします。

これまで高校生百貨店で様々なお店を訪れ、商品を取扱いました。実際に高校生が選んだ商品は、2016年は53商品を高校生が選定し、生産者の方36人にインタビューをしました。2017年は75商品を仕入れ59人にインタビューしました。2018年は、宮城県亘理町でも同時に開催し、亘理町の商品を含めて72商品、54人の生産者様に話を聞き、全部合わせますと、石巻圏域で3年間に約65社の企業生産者に話を聞きに行ったことになります。

このインタビューでは、生産者の方がどういう思いで商品を作っているか、どんなこだわりを持って生産しているかなどを聞きます。高校生たちは、自分の周りにある仕事を知ったり、大人がどのような思いで仕事しているかを知り、取り組み以外でも将来について考えるきっかけを得ているようです。

（３）「売る」だけでなく、ともに「作る」

高校生たちは商品を仕入れて売るだけではなく、2018年からは地元企業や生産者と共同で商品開発にも取り組んでいます。2018年は、お菓子屋「chez setta」と「ちぢみホウレンソウのシフォンケーキ」という、地元の野菜を使ったお菓子を開発しました。2019年は、「菓子の三平」というお菓子屋さんと、醤油やお味噌を作っている山形屋商店とコラボして「醤油ブッセ」を開発しています。こうした新しい地元の魅力を生産者と一緒に作っていくことも、高校生百貨店の取り組みでやっています。

地元企業・生産者さんとのコラボレーション

2018年　chez setta 説田さんと
「ちぢみホウレンソウのシフォアンケーキ」を開発

2019年　菓子の三平 三澤さんと山形屋商店 山形さんと
「醤油ブッセ」を開発中

かぎかっこ PROJECT

この活動に対し、生産者のこけし職人さんからは「高校生がオリジナルでデザインしたこけしを絵付け販売させていただいた時に、コラボすることで商品に新しい価値が生まれた。今後の作品の参考になる良いアイデアを高校生からもらえた」という声、お菓子屋さんからは「若い人と関わることが商売上なかなかないので、お店に来て自分た

ちの商品を売りたいと言ってくれることに感謝しています」という声を頂いています。

地元の水産加工会社さんは「普段自分たちが売っている商品の中でイチオシ商品じゃない商品を高校生が目をつけてこの商品を売りたいと言ってくれたことがすごく嬉しかった」と言って下さり、普段大人が売り方を悩んでいる商品を高校生が売ると意外と売れるということもあり、「そんなに仕入れても絶対売れない」と生産者さんに言われた商品を全部完売した時には、高校生の力はすごいと感じました。

（４）高校生の変化

高校生百貨店は、高校を卒業しても、例えばこけし職人さんの所で高校生時代に絵付けを体験した子が、大学生になってからインターンをしていたり、「大学生になってからお菓子屋さんでアルバイトをしたい」と地元のお店に働きに行くきっかけになったりしています。

販売会に参加した高校生の声として「『キミに話かけられなかったら買わなかった』と喜んでもらえた」「お客さんが自分たち以上に宮城のことを心配してくれたり、もっと宣伝してあげるよと言ってくれたりしたことが嬉しかった」「もっと貢献したいという思いがすごい伝わってきて嬉しかった」などの声があります。高校生たちが近年言ってくれているのは、「高校生百貨店を通して地域に貢献できたという実感が、自分にとって力になりました」ということです。

今年度は去年12月から活動をスタートし、今はちょうど生産者さんへのインタビューを行なっています。今年は仕入れる商品が43、約30社の生産者さんにインタビューに行きます。3月には仙台と山形、大阪で高校生が集めた商品を販売する予定です。

（５）高校生に地元を愛してもらえるように

私が6年間活動してくる中で、高校生の話で最も印象に残っているのが「高校生は家と学校の往復だということにこの活動をしていて気付きました」というものです。毎日勉強と部活で一生懸命学生生活を送っているけれど、実際生活している範囲は家と学校の往復ばかりの狭い範囲なのだと気付いたということです。「活動を通して活動地域に出て行くことで、地域や仕事、将来のことを考えるようになりました」と言ってくれました。

高校生で参加し、今は社会人1年目で働いている子は、「石巻は色々無いものが多く、無いものばかりが目に付いていたけれど、高校生百貨店を通して「あるもの」に気づけた。石巻には小さなお店でも頑張っている生産者さんがいて、そこのお菓子がすごく美味しくて、学校の友達にその事を伝えることができた時、石巻は伝えるものがある自慢できる町なんだということに気づけた」と言ってくれていました。

中高生の皆さんは、勉強を頑張ることもとても大切ですが、ちょっと目を地域に広げることで様々な気付きがあり、それまでの「無い無い」というネガティブな考え方から「ちょっとでも『ある』」となった時に、色んなものが開けてくると思い、できればそのようなものの見方で、普段の学校や地域での生活を送っていただけたらと思います。

私たちの最終的な目標は、高校生が地元を好きになり、社会や仕事、人間関係について地域の中から学んでいけるようになることです。家庭や学校に任せるのではなく、町全体で中高生を育て支えていく仕組みを石巻で作り、発信していきたい。この思いを、団体の理念としてやっておりますので、今後も様々な企業や学校、行政と協力しながら進めていきたいと思っています。（了）

「子どもが変わる　学校が変わる　地域が変わる
　子どもを主役とした地域共生型社会づくりの実践
　～学校・企業連携の可能性～」

2019 年 3 月発行
公益社団法人日本フィランソロピー協会
〒100-0004　東京都千代田区大手町 2－2－1　新大手町ビル 244 区
TEL 03-5205-7580 FAX 03-5205-7585
E-mail jpa-info@philanthropy.or.jp　URL http://www.philanthropy.or.jp

本誌の内容に関する無断掲載はご遠慮ください。
この冊子は、公益財団法人 JKA の補助を受けて
作成しました。
https://hojo.keirin-autorace.or.jp/